新国立劇場ニュース　2026年11月20日号
新国立劇場運営財団　オペラ広報

【速報】新国立劇場　開場30周年記念2027/2028シーズン オペラ公演演目の先行発表について

拝啓　平素は格別のご厚誼にあずかり、厚く御礼申し上げます。
　新国立劇場では2027年1月中旬に2027/2028シーズンラインアップ発表を予定しております。これに先駆けて、来シーズンの上演演目の一部をいち早くお知らせいたします。

ジュゼッペ・ヴェルディ作曲『アイーダ』　再演

指揮：アンドリー・ユルケヴィチ
演出：フランコ・ゼッフィレッリ
日程：2028年2月10日（木）、11日（金・祝）、12日（土）、13日（日）、14日（月）、15日（火）、17日（木）、18日（金）、19日（土）、20日（日）　全10回公演
会場：オペラパレス

リヒャルト・ワーグナー作曲『ローエングリン』　新制作

WORLD OPERA FORUM -Tokyo 2028-

指揮：大野和士
演出：サイモン・マクバーニー
日程：2028年7月5日（水）、8日（土）、12日（水）、16日（日）、19日（水）、22日（土）　全6回公演
会場：オペラパレス

■プロダクションについて

【アイーダ】



新国立劇場開場記念公演として1998年に制作して以来、絶大な人気を誇るオペラ『アイーダ』。古代エジプトの戦士ラダメスと敵国エチオピアの王女アイーダの悲恋を描くヴェルディの祝祭的大作を、開場30周年に合わせ5年ぶりに上演します。
伝説的巨匠ゼッフィレッリの『アイーダ』は粋を極めた演出で、古代エジプト世界が舞台に蘇り、息を呑むばかりの豪華絢爛な舞台が展開します。中でも有名な第2幕“凱旋の場”は音と視覚の大スペクタクル。有名な「凱旋行進曲」が高らかに鳴り響く中、総勢300名もの出演者が織り成す歴史絵巻は、オペラファンならずとも人生で一度は観てみたい名シーンです。幕開けからラダメスのアリア「清きアイーダ」や、アイーダの「勝ちて帰れ」と輝かしい名曲が続き、恋人たちの愛、父娘の想い、誇り、嫉妬、祈りと心理的葛藤がドラマティックに綴られます。

【ローエングリン】

ワーグナーの最もロマン派的なオペラ『ローエングリン』をサイモン・マクバーニー演出で新制作します。『ローエングリン』は中世の聖杯騎士伝説に基づく幻想的作品。聖杯王パルジファルに育てられたローエングリンは、窮地に陥った乙女エルザを助けに、白鳥の曳く小舟に乗って彼方から訪れます。その音楽は天上の音楽というべき崇高な響きと清らかな旋律美で、聴く者を神秘的な世界へ誘います。また、結婚式の音楽として誰もが耳にしたことのある「婚礼の合唱」や、ローエングリンが自らの素姓を明かす「名乗りの歌」など聴きどころも満載

です。神々しい音楽とともに待望の騎士が現れるローエングリン登場のシーンは、数あるオペラの中でも最も印象的なスペクタクルシーンのひとつです。
演出のサイモン・マクバーニーは英国演劇界が生んだ鬼才で、その大胆なセンス、そしてダイナミックで美的な舞台は、オランダ国立オペラ、エクサン・プロヴァンス音楽祭、メトロポリタン歌劇場などで上演された『魔笛』などのオペラでも話題をさらっています。

■プロフィール

アンドリー・ユルケヴィチ Andriy YURKEVYCH



ウクライナ出身。リヴィウ音楽大学を卒業し、シエナのキジアーナ音楽院とペーザロでゼッダ、ジェルメッティのもと学ぶ。リヴィウ歌劇場常任指揮者となった後、ウクライナ国立オデーサ歌劇場、モルドバ国立歌劇場、ポーランド国立歌劇場音楽監督を歴任。05年ローマ歌劇場へデビュー。その後モンテカルロ歌劇場、モネ劇場、バイエルン州立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、バルセロナ・リセウ大劇場、チリ・サンチャゴ市立劇場、ギリシャ国立歌劇場、ナポリ・サン・カルロ歌劇場、チューリヒ歌劇場、ウィーン国立歌劇場などへ招かれる。最近では、ジェノヴァ・カルロ・フェリーチェ歌劇場『道化師』、ニース歌劇場『蝶々夫人』、シュトゥットガルト歌劇場『夢遊病の女』、ポーランド国立歌劇場『リゴレット』、アンコーナ歌劇場『イル・トロヴァトーレ』、ヴィルバード・ロッシーニ音楽祭『セミラーミデ』、プラハ国立歌劇場『ナブッコ』などを指揮。26/27シーズンはフェニーチェ歌劇場『イェヌーファ』、ジェノヴァ・カルロ・フェリーチェ歌劇場『アルジェのイタリア女』にも登場予定。新国立劇場では19年『エフゲニー・オネーギン』、22年『椿姫』、26年『ウェルテル』を指揮している。

フランコ・ゼッフィレッリ Franco ZEFFIRELLI



1923年イタリアのフィレンツェに生まれる。46年ヴィスコンティと出会ったのをきっかけに、彼の助手を務める。53年ミラノ・スカラ座の『チェネレントラ』で演出家デビュー。60年ロンドンのオールド・ヴィック劇場で演劇『ロミオとジュリエット』、63年ミラノ・スカラ座で『アイーダ』演出のほか、映画など様々なジャンルで活躍している。リアリズムを主軸として、音楽とドラマを視覚的な美しさで見せるその演出は、彼自身のデザインによる絢爛豪華な装置、衣裳も含め高く評価されている。これまでの来日公演には、ミラノ・スカラ座による『オテロ』『ラ・ボエーム』『トゥーランドット』、メトロポリタン歌劇場『カルメン』『椿姫』などがある。映画監督作品に『ロミオとジュリエット』『ブラザー・サン・シスター・ムーン』『チャンプ』『ムッソリーニとお茶を』『永遠のマリア・カラス』などがある。2019年6月逝去。

大野和士 ONO Kazushi



東京藝術大学卒業後、バイエルン州立歌劇場でサヴァリッシュ、パタネー両氏に師事。ザグレブ・フィル音楽監督、バーデン州立歌劇場音楽総監督、モネ劇場音楽監督、トスカニーニ・フィル首席客演指揮者、リヨン歌劇場首席指揮者、バルセロナ交響楽団音楽監督、東京都交響楽団音楽監督を歴任。現在、新国立劇場オペラ芸術監督（2018年～）及びブリュッセル・フィルハーモニック音楽監督、東京都交響楽団芸術顧問。これまでにボストン響、ロンドン響、ロンドン・フィル、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、フランクフルト放送響、パリ管、フランス放送フィル、スイス・ロマンド管など主要オーケストラへ客演、ミラノ・スカラ座、メトロポリタン歌劇場、英国ロイヤルオペラ、エクサン・プロヴァンス音楽祭など主要歌劇場や音楽祭で数々のオペラを指揮。新作初演にも意欲的で数多くの世界初演を成功に導く。日本芸術院賞、サントリー音楽賞、朝日賞など受賞多数。文化功労者。フランス芸術文化勲章オフィシエを受勲。新国立劇場では『魔笛』『トリスタンとイゾルデ』『紫苑物語』『トゥーランドット』『アルマゲドンの夢』『ワルキューレ』『カルメン』『スーパーエンジェル』『ニュルンベルクのマイスタージンガー』『ペレアスとメリザンド』『ボリス・ゴドゥノフ』『ラ・ボエーム』『シモン・ボッカネグラ』『ウィリアム・テル』『ナターシャ』『ヴォツェック』『エレクトラ』『ピーター・グライムズ』を指揮している。27年3月に『カヴァレリア・ルスティカーナ/道化師』を指揮する予定。

サイモン・マクバーニー Simon MCBURNEY



俳優、作家、演出家で、現代を代表し、最も革新的で斬新かつ影響力のある演劇界の人物のひとり。1983年に演劇カンパニー「Complicité」を共同設立。近年では、振付家クリスタル・バイトと協働した『Figures in Extinction』が25年にネザーランド・ダンス・シアターにより初演。24年には英国ナショナル・シアターでの『Mnemonic』の25年ぶりの上演が絶賛される。15年

の『The Encounter』は「最も没入させられる演劇作品のひとつ（ニューヨーク・タイムズ紙）」と評され、数々の賞を受賞。また、21年には気候変動をテーマとするデジタル・パフォーマンス『Can I Live?』を共同演出している。優れた戯曲の演出や翻案も手掛け、直近では『Drive Your Plow Over the Bones of the Dead（死者の骨の上を鋤で耕せ）』（22年）を演出。22年には、ロバート・マクファーレンと共にスーザン・クーパー作『闇が迫る』をBBCでラジオドラマシリーズ化。オペラ演出には、オランダ国立オペラ／イングリッシュ・ナショナル・オペラ（ENO）『A Dog's Heart』、オランダ国立オペラ／ENO／エクサン・プロヴァンス音楽祭『魔笛』、エクサン・プロヴァンス音楽祭／オランダ国立オペラ／モスクワ・スタニスラフスキー劇場『放蕩者のなりゆき』、エクサン・プロヴァンス音楽祭『ヴォツェック』、ザルツブルク・イースター音楽祭／メトロポリタン歌劇場『ホヴァンシチナ』などがある。新国立劇場初登場。

報道各位におかれましては、一般の皆様への周知にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

【資料・写真のご請求、本記事に関するお問い合わせ】
（公財）新国立劇場運営財団　　制作部 オペラ広報：高梨木綿子
Tel：03-5352-5733／Fax：03-5352-5709／e-mail：takanashi_y1307@nntt.jac.go.jp